

自分を発見し、 他者と交流する喜び

——表現活動の柱

加藤康子

(三省堂国語教科書編集委員)

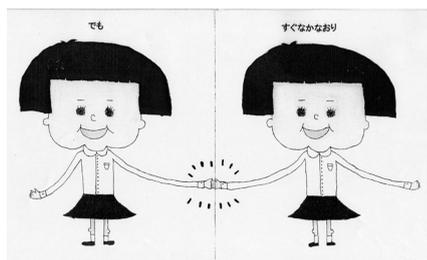
知識を取り入れ、そこから考えて、表現する。これが表現学習の型だと思いがちだ。だが、表現学習で最も大切なのは、表現活動をするなかで自分を発見し、他者との接点を見いだす喜びを体感することだと思う。この喜びが表現意欲を高め、おのずと表現を模索し磨く学習が進展する。

Aさんは、大学に入学したときグループで好きな本を紹介することがなかなかできなかった。読書家で物語を創作するを目指している彼女の内面には、多くの思いが詰まっていたはずだが、それを口頭で表現することに抵抗があったようだ。こうしたことは、Aさんに限らない。大学入学直後のまだ高校生の面影を残している新入生との授業で、表現できないという場面によく出会う。でも、それは表現力がないのではない。Aさんは物語を創作する授業で、合評を繰り返して、友人とめぐりあい、自分の物語を卒業制作として作り上げ、満面の笑みを浮かべて卒業していった。

Bさんは、悩みを抱え辛い思いでいっぱいだった。絵本が好きで絵本創作をしたいのに、辛い思いに押しつぶされて授業に出ることもできない。だが、先輩の創作絵本に自分と同じ思いが表現されていたことを教えられた。励まされ、自分を見つめて、ようやくその悩みを短いことばと絵で絵本にしてみた。悩みはまだ解決しないが、その絵本は

他の人に理解された。そこから二年弱、彼女は悩みから次のステップへと進む三冊の絵本シリーズを卒業制作として完成させ、心配していたお母さんが涙を流して喜ぶほど明るく笑って卒業した。

表現することは、自分と向き合い、他者と触れ合うことだと思う。いろいろな授業形式、教材は考えられるが、学習の中に「自分を見つめる」「他者と交流する」過程が必要だ。そこに「発見」「出会い」「喜び」が生まれるように授業を組み立てること、これが「国語表現」の教科書を作るときに念頭に置き続けたことだった。そのためには、目標がはっきりした「一仕事」を皆でやっていくような活動を設定することが効果的だと考えた。そして、活動の中で、生徒はどのようなことを感じたり考えたりしていくのか、それをわかりやすく具体的に示そうとしたのが『国語表現Ⅱ改訂版』である。



親もとを離れ、二〇〇六年四月に大学に入学したものの静かなCさんが、後期の授業で絵本『チッタとロッタ mail』を創った。双子の姉妹の悲喜こもごもの日常がのびのびと描かれている。どこか作者に似た二人が、けんかの後で手をつなぐ場面(図参照)は、「自分の発見」と「他者との交流」という表現学習の柱を象徴しているようだ。

かとう やすこ 梅花女子大学児童文学科教授。